

花の女子大生生活を満喫

野澤 美江子

兵庫県立看護大学大学院博士後期課程

ただ今、8月上旬。関西では連日、体温を超える最高気温が示され、暑さがこたえます。しかし、この「りれ一随筆」が掲載される頃には、きっと秋のすがすがしい季節になっていることでしょう。

お産が中心だった助産婦時代

私が新卒で就職した病院は、助産婦の数が少なく、NICU勤務を希望していたのですが、分娩室勤務を命じられました。そこで、年間100例以上の出産に立ち会いました。

ある晩、切迫早産の妊婦さんが入院してきました。私の顔を見るなり、「あなたに取り上げてもらった子どもを死なせてしまった」と泣き崩れたのです。聞けば、母親が目を離した隙に2歳の長女が浴槽に落ち水死、そのショックで今回予定日前に陣痛が来てしまったとのこと。私はその時どんな言葉をかけたらいのかかわからず、ただ傍らに座って、泣いている彼女の背中をさすってあげることしかできませんでした。幸い彼女の陣痛は落ち着き、無事正期産になってから出産しました。しかしあの時の、助産婦として自分の無力さを感じた体験が、私がお産から離れていったきっかけになったのかもしれない。

お産から離れた助産婦時代

その後、都立の看護教員養成講座で学び、看護学校の教員として就職しました。短大時代からの友人には、「あんなに看護婦になりたがらなかったのに、教える立場にいるなんて」と、よく不思議がられたものです。そんな私でも、関わった学

生が進学し、助産婦の後輩として働いていることを、とてもうれしく感じます。

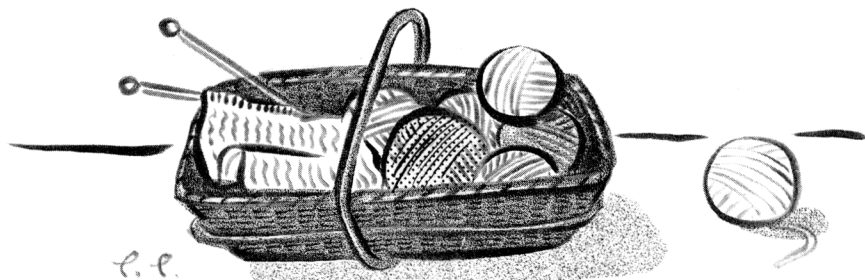
しかし、広範囲にわたる学生指導という専門学校の教員の荷は、私には重すぎたようです。臨床に安らぎを求め、再び病院に就職しました。温かいスタッフに支えられ、充実した毎日を送ることができました。

そこは、大学病院という性格上、ハイリスクの妊産婦さんが多いことに加え、助産婦学生の実習を受け入れ、新人スタッフも多いので、私が分娩を介助する機会は激減しました。しかしお産から離れることにこだわりはなく、それよりも入院している妊婦さんや褥婦さんのことのほうが気がかりだったのです。特に、不妊治療後に妊娠した妊婦さんの赤ちゃんが「貴重児」というレッテルを貼られていることに対し、彼女たちの気持ちを察すると複雑な思いでした。

その後、私は懲りもせず、また教育の現場に戻りました。臨床で自分が感じたことを学生たちに伝えたくなったからです。特に実習では、以前の教員時代より、学生をとおした関わりがとても楽しく感じられました。時には、助産婦の専門性と基礎教育の違いを理解してもらうことに苦勞したこともありましたが、臨床から学びとれるものの価値を改めて実感しました。ここで唯一の心残り、助産学を専攻した学生たちと関わらなかったことです。

自分もびっくりの Transition

この春、私は今までにない大きな Transition



(移行)を体験しました。それは、兵庫へ越して関東人から関西人になったことと、退職して社会人から学生になったことです。

● 今まで何度か引っ越しを経験しましたが、全て東日本であったため、今回初めての関西暮らしです。聞き慣れない関西弁、ヤクルトファンの私もびっくりのタイガースファンの熱烈な応援ぶり、ちょっと違う色彩感覚、スーパーに並ぶ食材の違い等。でも、5か月住んでみて、おいしい物がたくさんあったり、朝、窓を開けると潮の香りを感じたり、ゲーム終了まで放送される阪神の試合に躍起になるほど、結構、この地が気に入っています。

また、もうひとつの Transition は自分に対する挑戦でもありました。臨床で働いている時から人間の心理に興味があり、実践の場で感じたことの裏付けがほしくて大学院修士課程へ進学しました。しかし、この時は中途半端な思いで終わってしまいました。そこで、今回博士課程への進学を決意したのですが、退職し経済的な安定を失うこと、将来の生活に対する不安も大きかったです。

● でも、“花の女子大生”，良い響きだと思いませんか。ちょっと肌の衰えは隠せませんが、ペディキュアを塗った素足でミュールをはき、TシャツにGパンという安あがりなファッションで、毎日潮風と紫外線を浴びながら自転車で通っています。今まで乗っていた愛車を手放し、大好きだったバーゲンに行っても買いたい衝動をグッとこらえ、海外旅行なんてとんでもない、というくらいの禁欲生活の日々です。

いつも前向き

さて、ここで学生生活について触れたいと思います。妙に緊張した入学式。その後、教授と1対1、または2対2のゼミ形式の講義が始まりました。毎回のプレゼンはさすがに大変で、翻訳ソフトのような彼がほしいと、よく思ったものです。時には、全くやる気がおこらず、落ち込んでいると「退職までして自分で選んだ道でしょ」と友人に叱咤激励されることもありました。また、修士が看護学ではないという負い目もあったのですが、「わからないことがあるから進学してきたんですよ」という指導教授の“ゲキ”に励まされ、何とか今日までやれてきた感じです。1日24時間、好きな勉強を好きなだけできるなんて、なんて贅沢なんだろう、とようやく思えるようになりました。日々の苦勞を伴う学びは、きっと自分の財産の引き出しを増やしていつてくれることと信じています。

先日、ここまで頑張った自分へのご褒美に指輪を購入しました(禁欲生活と言っておきながら)。これからも、時には自分にご褒美をあげながら、花の女子大生生活を満喫していこうと思います。

このように自分を振り返ってみると、初心に戻れるような気がします。この機会を与えて下さった廣田さんに感謝します。私がこのあとバトンを渡す末光さんは、以前働いていた大学病院の後輩で、短期大学の教員、青年海外協力隊隊員を経験し、現在はクリニックで助産婦として働いています。そんな経歴をふまえた彼女の話を楽しみにしたいと思います。(のぞわ・みえこ)